

## 真の犠牲



あるとき、仏陀は質問を受けました。

「世界で最も裕福な人は誰ですか？」 仏陀は答えました。

「（自分の持っているもので）十分満足している人が、最も裕福な人である」

「最も貧しい人は誰ですか？」 という質問に対しては、

「多くの欲望を持っている人である」と、答えました。

この満足と放棄に関する仏陀の説法を聞いていた一人のマハーラージャ（藩王）が、  
仏陀の称賛を得たいと望みました。

仏陀はいつも傍にデンデン太鼓を置いていました。

あるとき、弟子たちが尋ねました。

「師よ！ あなたはなぜいつも、このデンデン太鼓を傍に置いていらっしゃるのですか？」

仏陀は答えました。

「最も大きな犠牲を払った人が私に近づいてきた時、私はこの太鼓を打ち鳴らすつもりなのだ」

皆はしきりに、その人が誰なのかを知りたがりました。そのような人は、しばしば歴史上では忘れられた人々です。この榮譽を手に入れたいと願ったマハーラージャは、象の背中に大量の財宝を積み込んで、仏陀の元へ行きました。マハーラージャは仏陀にこれらの財宝を捧げて、仏陀からの称賛を得たいと望んだのです。

道の途中で、一人の老婆がマハーラージャに挨拶をして、訴えました。

「私はお腹が空いております。何か食べ物を恵んでくださいますか？」

マハーラージャはパランキーン（輿）から柘榴<sup>ざくろ</sup>の実を一つ取り出して、老婆に与えました。老婆はその果物を持って、仏陀のところへ行きました。

その時まで、マハーラージャも仏陀の元へやって来て、仏陀がデندن太鼓を打ち鳴らすのを今か今かと待っていました。長い間、仏陀はその太鼓を使いませんでした。マハーラージャはずっとその場に居続けました。

老婆はふらふらした足取りで仏陀に近づくと、柘榴の実を仏陀に捧げました。その瞬間、仏陀は傍らのデندن太鼓を打ち鳴らしました。

マハーラージャは仏陀に尋ねました。

「私はあれほど多くの財宝を捧げました。あなたは太鼓を鳴らしませんでした。しかし、小さな果実を受け取った後、あなたは太鼓を打ち鳴らしました。これが大きな犠牲だということですか？」

仏陀は答えました。

「マハーラージャよ！ 犠牲においては、量は無関係だ。大事なのは犠牲の質だ。マハーラージャが黄金を差し出すのは自然なことである。しかし、自分の飢えをも顧みず、グル（師）に柘榴の実を捧げたあの空腹な老婆は、なんと大きな犠牲を払ったことだろう。老婆は自分の命さえ気に留めず、あの果物を私に捧げたのだ。これ以上の犠牲があるだろうか？ あり余るものを捧げるのは犠牲とはいえない。真の犠牲とは、あなたにとって最も大切なもの、最も価値のあるものを差し出すことなのだ」

学生諸君！ 君たちは自分の利己主義を差し出し、神への奉仕に身を捧げることによって、自らが信仰を置いている神を喜ばせなくてはなりません。全宇宙には神が充満し

ています。神は全知全能であり遍在です。神はどんな場所にも限定されないということ意識していなさい。神はどこにでもいますし、あなたの身体を含むあらゆるものに存在しています。身体を解剖しても、神を見ることはできません。しかし、心が神に向けられれば、神を体験することができます。月に着陸した人たちは、そこ〔月〕に神はいなかった、と言明しました。機械（ヤントラ）を通して、神を見つけることはできません。神は、マントラ〔真言、それを黙想すれば人を救うもの〕を通して体験することができるのです。

